

スポーツは人々を一つにする

4年後に開催が迫る東京オリンピック・パラリンピック。歴史的な舞台に向けて、2015年10月、競技力の向上はもとより、スポーツを通じた地域活性化や国際貢献などを推進していくための「スポーツ庁」が新設された。その初代長官を務める、ソウル五輪競泳金メダリストの鈴木大地さんに、世界共通の文化であるスポーツが果たす役割について聞いた。

スポーツ庁長官

鈴木大地



ソウル五輪100m背泳ぎで金メダル獲得が決まった瞬間。勝利を引き寄せたバサロ泳法は、流行語にもなった
(写真：日刊スポーツ/アフロ)

国境を越えて人をつなぐ
言葉を越えた力

私は水泳のおかげで、金メダルを獲得したソウル五輪をはじめ、さまざまな世界大会に出場し、学校の勉強では得られないようなことを数多く経験させてもらいました。2度の五輪出場後は海外で水泳の練習をするようになりましたが、現地のコーチが技術面での優れたアドバイスをしてくれただけでなく、私生活の面でもさまざまな面倒を見てくれるなど、貴重な出会いがありました。中でもミシガン大学在籍時は、たった3ヶ月の間に多くの人と知り合いました。彼らとは今もネットを通じて交友があります。

スポーツの素晴らしさの一つは、言葉を越えて人と人が通じ合えることです。同じ種目、同じルールの下であれば、世界のどこでも同じことをやっているのですから。ですが、具体的な訓練や戦術などの面では、同じ水泳でも国によってアプローチが異なります。そうした違いから互いに学び、理解し合うことができるとは、スポーツの大きな魅力です。

先日、シンガポールを訪問したのですが、シンガポールは華僑やマレー系、インド系などの人々が集まってできた新しい国なので、国としての伝統文化、アイデンティティーにあたるものがないのですね。そこで、スポーツをシンボルに人々をまとめようとしています。今年8月のリオデジャネイロ五輪では、旧ユーゴスラビアのコソボや5年前に独立したばかりの南スーダンが、初めての五輪参加を果たします。民族や歴史を超えて国を一





今年5月に行われたジャカルタ「絆」駅伝にも参加した。スタートラインで他の参加者と共に (提供: 毎日新聞社)

るかもしれません。車椅子の人たちを含めて、全ての人が生活やスポーツを楽しむこと。さらには人々がスポーツを通して心身を健康に保ち、元気なお年寄りが多い社会を作っていくこと。そうした、高齢化社会の新たなモデルを示す最初の国になることが、4年後という近い未来に東京でオリンピック・パラリンピックを開催する大きな意義ではないでしょうか。



マラソン元日本代表の有森裕子さんと共にシンガポールの水泳プログラムを視察・指導する鈴木長官。水泳、ひいてはスポーツ全体の振興に尽力している

既存の省庁の枠を超えて スポーツ行政を推進していきたい

性別や文化を超えて 日本と世界をリードする

日本社会では女性の社会進出が十分に進んでいないとよく指摘されますが、スポーツ界の現状をご存知ですか？ 実は、04年のアテネ五輪以降、日本代表に選ばれる選手は男性選手より女性選手の方が多いことも珍しくなくなりました。スポーツ界では比較的、女性が活躍する環境が整っているといえるでしょう。女性活躍という面で、スポーツ界が日本社会をリードしていければいいと思っています。

ただ、女性アスリートの活躍にもいくつか壁があります。結婚した女性アスリートが競技を続けることは増えてきましたが、日本の場合、出産後もアスリートとしてのキャリアを継続する選手がとて少ないのです。このことに関して、スポーツ庁では現在、調査研究を行っているところですが、出産を経験した女性アスリートのサポートは今後、重要な課題になってくると思います。

女性アスリートに壁が立ちほかかるのは、他の国でも同じです。途上国など、

つにまとめ、言葉や文化を超えて人々をつなぐ。スポーツの可能性はそこにあります。

オリンピックは平和の祭典 世界にビジョンを発信したい

オリンピック・パラリンピックは、アスリートにとってとりわけ特別な意味を持ちます。全てのアスリートがこの大会を目指し、世界中から選手が集まってレベルの高い戦いになるのですから。同じルールの下で、世界最高水準の人たちが争い、全身全霊で競技に参加する中で、大きなドラマが生まれます。いまや、単なるスポーツ大会ではなく、世界で最も大きなイベントの一つといえるでしょう。

とはいえ、オリンピックはメダル争いが本質ではなく、もともとは平和の祭典です。古代オリンピックでは、開催中とその前後の期間が休戦となったことに倣い、近代オリンピックでも国連が停戦を呼びかけています。

また、開発途上国では貧困層を中心に、スポーツがなければ犯罪などに手を染めていたかもしれない人々が、スポーツによって健全な生活を維持できていることもしばしばあるといえます。自国の代表や世界中の選手たちを応援することで、人々がつながり、前向きに生きていくことには大きな意義があります。

日本は2020年、東京でオリンピック・パラリンピックを開催することになりました。私はスポーツ庁長官として、現在、さまざまなスポーツや競技大会を



©Shinichi Kuno

スポーツに十分な予算を割けない国では、女性アスリートへの支援は、どうしても後回しにされがちです。また、一部の国では女性が人前で肌を見せることが禁じられているなどの理由で、服装に制限のある状態で競技に参加せざるを得なかったり、時には競技への参加自体が不可能だったりすることがあります。水泳は、まさに女性の参加が制限されやすい種目の代表です。そうした文化を否定するのではなく、尊重しながら、世界中の女性アスリートを支えていきたいと考えています。

スポーツを通して世界を経験することは、私にさまざまな学びと、多くの友人を与えてくれました。今では日本と世界の交流により、世界各地にルーツを持つ多くの選手が日本に育ち、新しい可能性を生み出しています。スポーツを通じた国際交流で国を発展させ、人々をつなぎ、新たな道を開く。日本の国際協力が、今後も日本と世界の発展の一助となることを願ってやみません。

すずき・だいち

1967年3月10日生まれ。88年、ソウル五輪の競泳男子100m背泳ぎで金メダルを獲得。日本水泳界の復活に貢献した。引退後は解説者、指導者、研究者として、多方面で活躍。日本オリンピック委員会理事、日本水泳連盟会長などを歴任した。2007年に博士(医学)を取得。

観戦し、一人のスポーツファンとして心から選手たちに声援を送るとともに、今後の日本のスポーツ界がどのような活動をすべきか、検討を重ねています。

一人の選手の育成は、クラブの人々やコーチ、一緒に練習する仲間など、さまざまな人の力に支えられています。国による支援もその一つです。私は国に支えられ、五輪に出場できた選手として、引退後はそれまでの恩返しのためにも水泳連盟などの仕事を手伝ってききました。いま、スポーツ庁の長官として、果たしたい目標がいくつもあります。

その一つは、スポーツを通じた国際貢献を、もっと盛り上げていくことです。スポーツの振興とは、自分の国が強くなれば良いということではありません。開発途上国を支援したり、世界のスポーツ界に貢献したりすることは、先進国としての日本の在り方として重要です。例えば日本はドーピング対策において、世界でも極めて高い水準にあります。ドーピング違反者を出さない国として、世界のスポーツ界をリードしていくことは、日本が果たせる重要な役割の一つだと思います。

もう一つは、東京大会において、高い競技成績を目指すだけでなく、高齢化社会の新たなビジョンを示していくことです。30年後の日本を考えてみてください。先進国の中でも高いペースで少子高齢化が進む日本では、人口に占める高齢者の割合が大きく増えているでしょう。パラリンピックには車椅子を使う選手も多数参加しますが、30年後の日本では車椅子を使うことはニューノーマルになってい

from
ソロモン
諸島



ロスフェロ・シオシ選手/
陸上・長距離

- ①2015年パシフィックゲームズ 10000m金メダル、5000m銀メダル
- ②常に全力を出すこと
- ③世界の強豪選手たちと戦い、自分も世界的な選手の一人になりたい

シャロン・フィリスア選手/
陸上・長距離

- ①2015年パシフィックゲームズ 10000m金メダル、ハーフマラソン金メダル
- ②仲間と共に常に自分に挑戦する気持ちと、勝者になりたいと思う気持ち
- ③自己ベストを出して、自分のレースを全うしたい

リオ五輪にかける！

藤山 直行さん (青年海外協力隊OB)

1990年から青年海外協力隊としてソロモン諸島の子どもたちに体育を教えました。その後、機会があってナショナルチームの指導に携わることになり、現在は同国のオリンピック協会に所属しています。陸上の指導を始めた当初は人数がそろわず、雨の日は一人グラウンドで選手を待つこともしばしば。でも選手たちは少しずつ陸上を好きになり、しっかりと練習に向き合うようになりました。フィリスア選手とシオシ選手は、ともにリーダーシップがあり、他の選手を引っ張ってくれる存在です。2人には、人々に夢を与えられるような選手になってもらいたいです。



フィリスア選手の練習風景。スパイクシューズは高価なので、靴底が剥がれたら縫い合わせて使っている

アスリートなら誰もが憧れるオリンピック。世界各国で練習に励む選手たちを、JICAボランティアやボランティア経験者らが力強くサポートしている。オリンピックでの活躍を誓う選手と指導者を紹介しよう。

特集スポーツ
人をつなぎ、国をつくる

二人三脚で挑む！世界最高峰の舞台へ

リオ五輪にかける！

江口 吹樹さん (青年海外協力隊)

小さいころから柔道一筋だった私は、昨年2月から青年海外協力隊としてサモアで柔道を指導しています。到着後、初めて現地の柔道教室を訪れると、体重160キロを超えるひととき大きな男性が子どもたちに柔道を教えていました。それがスア選手でした。サモアには彼の練習相手となるような同じ体格とレベルの選手がいないため、一緒に子どもたちを教えながら、スア選手の指導にもあたっています。体重差100キロ近くある選手に、指導者として負けれられないのは正直大変ではありますが、オリンピックまでの残り数カ月間を二人三脚で戦っていきたくです。



子どもたちは、江口さんを奪い合って練習をしたがる

from
サモア



デレク・スア選手/柔道

- ①2015年オセアニアチャンピオンシップ 銅メダル
- ②サモアが誇る強じんな筋肉
- ③吹樹先生に対する感謝の気持ちを勝利という形でプレゼントしたい

アレクサ・モレイラ選手/
陸上・走り幅跳び

- ①2014年ジュニア南米選手権 金メダル
- ②いかなる場面でも集中できること、トレーニング後の回復力
- ③2019年のパンアメリカン競技大会をしっかり戦い、東京オリンピックに出場したい

from
ペルー



東京五輪にかける！

椿原 孝典さん (シニア海外ボランティア)

※写真右から3人目

かつて青年海外協力隊として陸上の指導に携わった私は、昨年、シニア海外ボランティアとして約30年ぶりにペルーを訪れました。当時の教え子たちは今では立派なコーチとなり(写真両端)、3人の選手たちと一緒に指導しています。コーチの元コーチである私に対し、選手たちは若干複雑な思いを抱いたようですが、コミュニケーションを密にしながら練習を重ねるうちに、すぐに信頼関係を築くことができました。オリンピックという大舞台に挑戦できる環境下にいる選手たちには存分に楽しんでもらいたいし、私もそのための支援は惜しまないつもりです。



モレイラ選手を指導する椿原さん。1年間のリハビリを経て、けがからの復帰を遂げたモレイラ選手は、自信がよみがえったような顔付きに変わったという

from
カンボジア

東京五輪にかける！

土谷 龍一さん (シニア海外ボランティアOB)

2012年にカンボジアに派遣された際、まず驚いたのが、20年以上前の古いカヌーと、手作りの木製パドルが使われていたことです。選手には道具を購入するお金はないので、まずはアジアカヌー連盟に働き掛けて6艇のカヌーと最新のパドルを贈呈してもらい、練習環境を整えました。選手とは、時間を守る、うそをつかない、真面目に練習するなど、ごく当たり前の約束事を交わり、私自身も毎日時間通りに顔を出して信頼関係を築いてきました。目標は高ければ高いほどやりがいがあります。一つ一つの積み重ねが、必ずや夢の実現に近づくと思っています。



セメントをバケツの型に流し込んだ手作りのバーベルは土谷さんの発案だ

- ① 選手プロフィール
- ② 自身の強み
- ③ オリンピックにかける意気込み

ボン・ナルン選手/カヌー

- ①2016リオデジャネイロ五輪アジアカヌー予選競技会 準決勝進出
- ②スタートダッシュが得意、弱音を吐かない
- ③まずは東南アジア、次にアジアで一番になり、東京オリンピックの代表権をつかみたい

ボンナ・ラデー選手/カヌー・カヤック

- ①2016リオデジャネイロ五輪アジアカヌー予選競技会 準決勝進出
- ②スタミナとパワーがあり、ラストパートが得意
- ③土谷先生の厳しい練習に耐えて、4年後の東京オリンピックには必ず出場したい